
真・恋姫夢想 ～史上最強の漢～

シャケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫夢想 〱 史上最強の漢〱

【Nコード】

N1869V

【作者名】

シャケ

【あらすじ】

現代で不良と呼ばれていた前田 仁は、パトカーにはねられて死んでしまった。そして、目が覚めたら、身体が縮んでしまっていた（笑）。というか、恋姫の世界に転生していた。ちなみに全く本人は気づいていないが。とにかく前田仁、改め、仁はこの世界でどのように生きていくのであろうか。

漢一1（前書き）

ども、シャケです。

初投稿ですので、読みにくい等あるでしょうし、人物崩壊等ももしかしたらあるかもしれません。

それでも大丈夫な人だけが続きを読んで下さい。

また、アドバイス等がございましたら、書いて頂けると嬉しく思います。

漢一

「ごめんなさいね……貴方を育てる事の出来ないこの母を許して……」

そう言って、一人の女性が大きめのカゴを門の下に置き、泣きながら走り去っていった。

そのカゴの中には一人の赤ん坊が寝かされている。

（おいおい、転生して生まれ変わったと思ったら突然捨てられんのかよ！？ああ……あの新しい母さんもどっか行ったし……俺も赤ん坊やから動けんしなあ……）

俺の前の名前は前田^{マエダ}仁、一応高校生やった。

何故俺が死んだのかというと、高1の夏休み中に廃工場で青春を桜花していたら（まあ分かんと思うけど、喧嘩ね喧嘩！！）、思った以上の大乱闘に発展してしまって（……確か地元の7つの高校の野郎共総勢400は越えてたな）警察が来たから逃げようとして道路に飛び出したらまさかのパトカーに………って感じやったと思う。

それからの事は覚えてないけど、気がついたら今の状況って所ですね。

どうやら彼は男の子に転生したようだ。

そんな彼の今の名は、姓は孫^{ソン}、名は海^{カイ}、字は悟空^{ゴクウ}、真名^{ジン}を仁という。

（まあこれからどうなるんかねえ……ってこのままじゃまた死ぬな………）

この状況でも一人冷静に物事を考えている彼はかなり落ち着いた人物に見えるが、実際はあまり何も考えてないだけだったりする。

（よし、とりあえず泣いておこうか）

「オギヤア!! オギヤア!! ホギヤア!! オギ……」

案外泣こうと思ったら泣けるので、立ち上がれるかとも思ったが、まったく立ち上がる事は出来なかった。

「ホンギヤアアア!!」

(誰か俺に気づいてくれ!!!)

??? side

とある森の中、一人の女性が颯爽と駆け抜けていた。薄い桃色の髪をなびかせ、褐色の肌の女性がその蒼眼にうつすらと涙を浮かべながら……

「うう………仁………」

私はあの子を捨ててしまった。
考えれば考えるほど罪の意識に囚われてしまう。

でも、あの人の最期の遺言だから……

私が愛した傭兵の最期の遺言だったから……

『もしも、産まれてくるガキが男だったら、一度何処かに捨ててやってくれ。勘違いするな、確かに捨てはするが、それはコイツに自由にさしてやりたいからだ。王族のそれも長男として生まれたとしても、そいつにだって他にやりたい事があるやもしれんからな。何せ俺のガキだ、決められた道を歩きたいとは思わんだろうからな。よろしく頼むぜ、江蓮』

私が正しいとは思わない。

だけど、あの人の言葉を無下にしたくないの：

女性は立ち止まり後ろを振り向いた。
その瞳にはもう涙は無かった。

「孫悟空！！貴方は私、孫文台の息子なのだから、強く、自由に生きなさい！！もし、貴方がこの呉に武官もしくは文官として現れたなら、その時は……その時は、すべてを貴方に話しましょう。だからこそ強く生きるのです。我が愛しの息子、仁。母はいつも貴方の無事を祈っています」

そう言いきった女性は、また涙を流していたが、その表情は穏やかな聖母の表情そのものようであった。

彼女こそ、姓を孫、名を堅、字を文台、真名を江蓮という、後に産まれてくる孫策、孫権、孫尚香の母であり、呉の礎を築いた『江東の虎』と呼ばれし英雄その人である。

仁side

もう泣けねー、疲れたし、何だか眠い。また死んじゃうのかねえ俺は……もう駄目だ、眠い、何か周りがウルサイがもはや目も開けれん位に眠い。

俺は迫りくる眠気に身を任せ、すぐに意識を手放した。

無事に生きていることを祈りながら。

まあ結果だけをいうと、生きることが出来たわけだ。

あの後、優しそうなおぼちゃんの中で目を覚ました時は、喜びのあまり、小便漏らしてしまったからな。

拾われて2ヶ月程経った。

今の所集めた情報によると、俺が拾われたのは結構厳しい生活をしている農家で、家族は俺を拾ったおぼさんと、その旦那だけ。

後この世界は、何か、かなり昔の世界みたいだ。何でかっていうと、農家がクワとか使って作業してるからだ。

あと賊がでるらしいからな、山賊みたいなものかな？

それに兵を集めてる所もあるみたいだけど、その格好がゲームで見た、三國志の兵隊みたいな格好やったしな。

ちなみに、俺の名前に中国かなって思っているが、実際は分からん。

何故なら日本語だからだ。

何故情報が色々あるかというのは、おぼちゃんがいつも背負って連れてってくれるからだ。

まあ色々と考えてみたが、全然分からん。

もともと頭は悪いからな。

結論として、とりあえず、この世界はこの世界で楽しく生きようか
なってるわ。

強そうな奴もいっぱいいるからなあ。

こりゃあ、楽しめそうだ。

漢一1（後書き）

何かすみません。

孫悟空って自分で字を考えれ無かった自分が恥ずかしいです。

次回はちょっと時間を飛ばしていきます。

いつまでも赤ん坊では話が進みませんからね。

漢一2（前書き）

すみません、果てしなく遅くなりました。

言い訳を言っても見苦しいと思うので言い訳はしません。

作者はカメよりもナメクジよりも執筆速度が遅いのです。

コメントをくださった方には遅くなりすぎて申し訳ない気持ちで一杯です。

漢一2

まああの後は、なんやかんやあったが、それを簡単に説明しよう。

0歳6ヶ月

俺が歩きだす。

義母が驚いて腰を抜かす。

0歳11ヶ月

俺が始めて喋る。

「メシ」って。

義母がまた腰を抜かす。

2歳

たどたどしいが、一応しっかり話せるようになる。

神童と呼ばれる。

義母を「おばちゃん」と呼んだせいで、全てを話してもらうことになる。

4歳

村の悪餓鬼どもと喧嘩する。

何か俺、結構強かった。

悪餓鬼って呼ばれたす。

5歳

村の悪餓鬼達の頂点に立つ。
(5〜12歳の子供)
クソガキって呼ばれたす。

7歳

大人との喧嘩に勝利する。

やっぱ俺は強いわ。

鬼の子と呼ばれるようになった。

12歳現在

最近じゃ、何処かで揉め事が起こると乱入してる毎日が続いている。

っとまあ最近までを振り返ってみたが、俺喧嘩してばかりだな。

よし、今日は村にある大木の上で居眠りながら色々考える日にすることにしよう。

俺は大木の近くまで行くと跳躍して一発で木のかかなり上のほうの枝に乗り、持ってきた俺のお手製枕に頭を乗つけて村を見下ろしながら色々考えることにした。

うーん、しかし最近ほ、こんな田舎の村の方へまで賊が出てくる始末……この国の総理大臣は何をやってるんだろぅなあ。

たしかこの辺の領主の董卓は善政を敷いてるらしいが……善政ってなんだ？

まあなんにしても、結局この辺まで賊が出るんだから董卓の善政とかいうやつもまだまだだな。

この辺は比較的マシな方だと最近村にやってきた餓鬼が言ってたな。

じゃあ他のところはもっともっと賊が出て、大変なんだろうな。

もしも、その賊がこっちの方に来たら俺は村を守れるのかなあ……………

今までこの村にやってきていた賊は20人ぐらいの少数の山賊で、来るたびに仁がボコボコにして追い返していた。

「ふぁー、久しぶりに頭使ったから頭痛いわ……帰ってもう一眠りするかな。村もなんにも起きてなさそうだからなあ」

長々と考えていた仁が身体を起こして背中を伸ばしていると急に嫌な予感がした。

「うおっ、ゾクっとした!!何か嫌な予感するぞ。あっちの方かな」

仁は大木の上から飛び降りると急いで嫌な予感のする方へと走り出した。

俺の勘はよく当たる。

何も無いことなんてたぶん無いんだろう。

着いたところで仁の視界に飛び込んできたのは、いつも追い払っている賊の一人と思われるおっさんが、今まさに村人に剣を振り下ろす瞬間だった。

ザシュツ

「ぎゃあああああ」

村人の左肩のあたりから右のわき腹らへんまでに赤い線が入りそこから赤い液体が噴出していた。

「ぎやはははは、俺様に逆らうからこうなるんだよ!! お前が今から死ぬのは鬼の子が俺に情けをかけて生かしたからだよ!! 恨むなら鬼の子でも恨んでな!!」

「お父さん!! お父さん!!」

俺はただ漠然とその光景を見て立ち尽くしていた。

今まで自分の体が刃物で何度か斬られたことはあったが、かすり傷だった。

なんでこのオッサンを生かしたのか? 情け? ちがう、怖いからだ。

殺すのが怖い、人を殺すのが怖いし殺されるのも怖い。

前世の記憶が軽く残っている俺には殺人なんて出来ないしされたくない。

でも、俺の恐怖心のせいで、今泣き叫んでいる子供の父親は死ぬ。

俺のせいで死ぬ。

その子供の心も死ぬ。

全部俺のせい。

何故もつと早くここに来なかった、何故あのオッサンを殺さなかった、何故、この世界で生きる決心が早く出来なかったんだ。

一瞬呆けていた俺は山賊のオッサンのところへと歩き始める。

「おお、鬼の子か、テメエのせいでこの餓鬼の親父は死んだんだよ、どうするのかな？俺を殺すのかな？無理だよねえ、鬼の子と呼ばれていても所詮は子供、どんだけ強くても餓鬼だもんなあ」

薄ら笑いを浮かべているこのオッサンを俺はただ黙って見ていた。

明らかに逝ってしまっている目、がりがりの体、痩せこけた頬、そうかオッサン、苦しかったんだな。

俺がお前等の稼ぎ場所を守ってるから苦しかったんだな。

今のご時勢から考えて、働き口がなかったから山賊になるしかなかったんだろう。

でもな、

それでもな、人は殺しちゃいけないよ。

少年 side

お父さんが、山賊に斬られてから僕はただただお父さんの側で泣き続けていた。

「おお、鬼の子か、テメエのせいでこの餓鬼の親父は死んだんだよ、どうするのかな？俺を殺すのかな？無理だよねえ、鬼の子と呼ばれていても所詮は子供、どんだけ強くても餓鬼だもんなあ」

山賊がそんな事をいったと思い顔を上げると、そこには鬼の子とよばれている仁君が立っていた。

仁君の顔は無表情なんだけど、なんとなく哀しげな顔をしてると思った。

「……ちゃ…いけないよ」

ふと、仁君が話したと思った瞬間だった。

一瞬で山賊との間合いをつめて、お父さんの使っていた剣をいつのまにか持っていた仁君は、体勢を前傾に倒した状態からその剣で一気に右の腰の辺りから首のあたりまで斬り上げた。

「うわあああああああああああああ」

悲痛な叫び声をあげながら。

仁side

人を斬った。

自分の手に人の肉の感触、骨の部分の感触が生々しく残っている。

それに俺の顔面に返り血が飛び散り、その血は生暖かく、そして倒れていくその山賊のオッサンの目が俺を見ていた。

「ううっ…うげっ……………う」

俺は吐いた。

その場にひざをついて、吐きまくった。

一通り吐くと、今度は辺に落ち着いて頭が理解しだす。

人を殺した。

俺はこの人を殺したんだ。

この人にだって家族がいるんだ。

この人にだってまだまだ人生があっただ。

ソレを俺は奪った。

吐くものを吐ききると今度は涙が止まらなくなった。

怖い、怖い、怖い。

恐怖で体が震える。

どうしたらいいのかわからない。

あの父親の子供は怖かったのか逃げていた。

そらそうだ、俺だってこんなに怖いんだからな。

でも本当に怖いのは殺したことじゃない。

人を殺したのに、人を殺すことにすこし興奮してきている俺自身が一番怖い。

分からない分からないワカラナイ…………

ナンデコンナニモコウフンシテルンダ…………

「うがあああああああああああああああああああああ
あ」

何も分からなくなった俺は叫びながら人から逃げるように、村を飛び出したのだった。

漢一2（後書き）

いかがでしたでしょうか。

文才の無い自分が嫌になりますが、気にはしないようにします。

さて次回は、恋姫キャラとの初接触を目論んでおります。

まだまだ試行錯誤を繰り返している段階なので、また更新は遅くなるかもしれませんが、作者も頑張る予定なので生暖かく見守って頂けたら嬉しいです。

漢一3（前書き）

遅くなりました、シヤケです。

書いてて改めて思いましたが、文才が欲しかった今日この頃ですね
……

漢一3

気がつくところには、動物の楽園だった。

「あれっ、何だここは……それに俺は確か……」

まだ寝起きでぼーっとする頭を動かしながら、今までの事を思い返す。

人を殺したこと

今では何故か落ち着いて思い出せる。

無我夢中に山賊のオッサンを切り捨てた俺は、
自分が分からなくなっ、怖くなっ……

逃げた。

ひたすら遠くに、

人に会わぬよう獣道を走り続けた。

どれぐらい走ったのかは知らない。

日が何度昇ったのかもあまり覚えていない。

恐らく、空腹で倒れたのだろう。

ぐうううう……

「腹へったな……てかこの犬とか猫とかは何だ？それにここは……」

仁が顔を真横に向けるとそこには、赤紫っぽい髪の褐色肌の少女がすやすやと眠っているのが見えました。

あれっ、なっとなんで!？

てか、誰!!??

それに、何故か動けないなあっと思ったら、この少女が仁の身体を抱きしめながら眠っているからだった。

「……良い匂いがするぞ……」

それから数刻、仁はその少女が昼食を食べているときに目を覚ました。

「ん……おきた？」

「ああ、なんか後頭部がズキズキするが、寝起きだからしかたないのかな」

朝の記憶がすっとんでいる仁だった。

「てか、ここは？それに君はなんていうの？」

「……ここは、恋のおうち。…恋は呂布……奉先」

呂布は買ってきたのか、肉まんをはむはむと食べながら答えてくれた。

ぐるるるるるるるるる……

「悪い、呂布。俺にもその肉まんをくれないか？腹が減ってしかたないんだ」

「……………ん」

そういつて、呂布は持っていた肉まんのうち2つを俺に差し出してくれた。

俺はそれを受け取ると飲み込むように食べた。

「ふう、生き返った。ありがとな呂布」

「……………別に…大丈夫」

俺が食べ終わって、呂布に頭を下げると呂布は別段気にしている様子もなく、周りの犬猫たちと戯れていた。

「あと、忘れてたが、俺は性は孫、名は海、字は悟空っていうんだけど、呂布は俺の命の恩人だから真名を預けたいんだが、受け取っ

てもらえるか？」

「……ん…大丈夫、孫海…いい人っぽい」

「ありがとう、俺の真名は仁。よろしくな呂布」

「……………恋でいい」

「って、それは、真名だろ!？」

俺が助けにくれたお札に真名を預けると、呂布は自分の真名の恋を俺に預けようとしたのにはかなり驚いた。

「…仁は恋に真名を預けてくれた。…それに…仁は良い人……だから大丈夫」

無表情だが確かに強い意志のこもった目で見つめられた俺は折れるしかなかった。

「わかったよ、恋。本当にありがとうな」

「……………ん」

相変わらず無表情だが、俺にはわずかに喜んでるような気がした。

「ところで、恋の両親は？ 助けて貰った手前挨拶はしときたいんだけど……………」

「……………とと様とかか様は死んだからいない」

恋のその言葉にバツが悪くなった俺は恋に謝ったが恋は「…大丈夫」と言ってくれた。

だが、ふと疑問に思った。

これだけの動物達と生活するにはそれなりに金が必要だと思うのだが…………どうやって稼いでるんだ？

「じゃあ恋は一人でこの子達と生活してるんだな？」

「…………コクコク」

恋が首を縦に振る。

つまりYESということだな。

「じゃあ、どうやって生活の金を稼いでるんだ？」

「……………傭兵？」

いやいや、そこで首をかしげられても困るのだが…

「傭兵って事は、恋ってもしかして人を殺した事あるのか!？」

つい最近初めて人を殺してしまったせいかな、かなりの剣幕で聞いていた。

「…ある」

恋は少し俺の様子に怖がったような表情を、見せたが答えてくれた。

俺とそんなに変わらない位の子が、俺よりも人を殺した事があるのか……

「……………仁は人を殺した？」

恋の質問に少し間を置いて俺は静かに頷いた。

「……怖いのか？」

「恋は怖く無いのか？人を殺してるんだぞ？確かに悪いやつだったかもしれないが、それでも同じ人間なんだ。そいつにもまだ人生があつたのにそれを奪ったんだぞ？」

俺の話は恋は黙ったまま聞いてくれた。

「俺は怖い。死ぬほど怖い。あの殺した人の家族や友人が俺を殺しに来るかもしれない。それも怖い。だがそれよりも、俺はその人の人生を背負って生きなきゃならない。その重みが一番怖い。」

話してると怖くなってきて身体が震える。

今までどんな奴と相対しても恐怖したこと無かったのに、今はただ奪った命の重みが怖い。

ふと、俺の身体が温もりに包まれる。

「……仁、怖かった、でも今は平和じゃない、平和じゃないと闘わないといけない、生きてくために闘う。その人の命は重い、けど負けるのは駄目」

俺の身体を包んだのは恋の温もりだった。

「……ただ人を殺すの良くない、生きるために殺さなくちゃならない人もいる。……自分勝手って言われても生きなきゃ駄目」

恋は多分というかほとんど話すのは苦手なのだろう。

だけど、今、一生懸命に俺に生きろと、その重みも抱えても生きろと言ってくれてる。

殺しに良いも悪いも無いだろう。

しかし、奪わなければならぬ命もあるのだ。

そして俺は、その命を背負って生きなくちゃならない。

どんなに自分勝手でもなんだろうと、奪った命に報いる為に生き抜いて行かなきゃならない。

「……大丈夫、恋は仁の事嫌わない」

この言葉だけでも、俺は救われる。

気がつくと俺は恋の腕の中で泣いていた。

どれぐらい泣いただろう。

「恋、もう大丈夫だ、ありがとうな」

そういつて恋から離れる。

「……よかった」

「本当にありがとうな」

「……別に大丈夫、仁、辛そうだったから、でももう大丈夫」

……どうやら、かなり大きな借りが出来たな。

俺は、寝台から降りて床に座り頭を下げる。

「恋、お前には返しても返しきれない恩ができた。またこんな事を言うのは図々しいかもしれないが、頼みがあるんだ」

恋は俺の行動に少し驚いてるのかしゃがみこんで俺を見ている。

「俺をここに置いてくれ！！お前の力になりたいんだ！！」

頭を地面にすりつけながら頼んだ。

所謂、土下座だ。

しばらくして、恐る恐る顔をあげる。

「……………仁は恋の家族になる??」

恋は一生懸命考えてくれてるみたいだ。

「おう、家族になる、家族になってお前を守る!!」

「……………恋が仁を守る、だって家族だから」

あれ?

守られるの俺?

まああれだけ泣いてるのを見たらなあ……

いやいや、そこは俺のプライドが許さん。

「なら、俺は恋の兄貴になる!! 兄貴は妹を守らなくちゃならないから、俺が恋を守る。こればかりは譲らん!!」

「…仁兄い??」

「宜しくな、恋！」

そういつて恋の頭を撫でてやると気持ち良さそうに目を細めていた。

その日は、恋の家族に盛大な歓迎を受けるのだった。

俺は世界で一番大切にするべき物ができた。

たった一人の妹、呂布こと恋を、俺は絶対に守ってみせる。

俺は、もっともっともっと強くなってやるからな！！

漢一3（後書き）

はい、恋ちゃんと義兄妹になりましたあ！！

もしも恋ちゃんが妹だったら確実に作者はシスコン街道まっしぐらだったでしょうね！！

すみません、興奮してしまいました…

とりあえず、初の恋姫キャラは恋ちゃんでした。

次回からはしばらく妹恋ちゃんとの拠点みたいな物をしながら着々と成長させる予定です。

出来るだけ早く投稿出来るように頑張ります。

ではまた次回に会いましょう。

漢一4（前書き）

ども、遅くなりました。

文を書くのって本当に難しいですね……

改めて、他の作者の皆様の凄さを感じました。

もし、何かこの作品がオカシイ事になったとしても、見守って頂けると嬉しいです。

漢一4

ふわあああ……

ども、仁です。

昨晩は動物達の熱烈な歓迎によって疲れ果てて眠ってしまいました
……

ちなみに、恋は俺よりも先に寝台に寝かせた……はずなのに何故？

「すう……すう……」

俺の横で俺の腕を抱き抱えて眠っているのは本当に何故なの？

「恋、何でここで寝てるんだ？？」

「すう……兄い……」

はう！？

可愛すぎだろこれは！！

「何だこれ、なんなんだよおおお!!!!」

「……………うるさい」

そしてまた俺は眠り（強制的）につくのだった。

まあ、朝っぱらから軽く問題があったが今はようやく朝食を食べることに成功している。

「恋、傭兵の仕事って基本的にどんななんだ？」

「……………賊の討伐とか、用心棒」

マフマフモフモフ……

はい、会話終了。

恋ってやっぱり基本的に無口なんだな。

まあ、朝食（恋が買ってきた肉まん）をただひたすらに一生懸命食べてる恋はなんか可愛いから許す。

「じゃあ、今日このあと俺も恋の仕事手伝いに行くわ」

「…………兄い、大丈夫?？」

少し心配した表情で俺のほうを見る恋（肉まん装備）は、恐らく傭兵の仕事の中に、人を殺さなくてはならないことがあるのだろう。

だから恋は心配なのだろう。

可愛いやつめ……

「…………ん／＼／」

軽く恋の頭を撫でてやる。

「大丈夫だ、心配すんな。俺はお前を守る。覚悟も決めた。後は精神を鍛えるのみだ」

「…………無理しちゃ駄目、兄いは恋が守る」

逆に恋も俺の頭を撫でる。

ちよつと照れるなこれ…

「わかった、無理はしない。でも俺が恋を守るんだ、ここは譲らん。兄としてな」

「…………むう」

少しむくれたような顔になったな。

若干だがな。

「…………兄い、武器は？」

「武器？俺の体が凶器だ」

な、なんだ！？

呆れたような目が俺を射抜いてるんだが……

「恋、本当に俺の体が凶……武器なんだよ」

「…………駄目、そのままじゃ怪我する。武器はもうからあとで一緒に町に行く」

「いや、俺の体が……」

「……駄目」

「了解しやした」

恋の有無を言わさない視線に、今まで負けた記憶のない俺の心が一瞬で破壊された……

はい、町に来ました。

手抜き？知りませんそんな事は。

「ほお、ずいぶんと賑やかなところだなあ、俺の住んでた村の数百倍は賑やかだな」

「……兄いの村は賑やかじゃない？」

「いや、田舎の村だったし、そんなに大きくないからここまで賑やかじゃないだけだ」

まあ、あんな森の中にあるわずか40人ぐらいの超小さな村と、家と人だらけのこの町を、比べるのは間違いだと思うけどな。

そんなことよりもだ。

「恋、手を離してくれ。なんか妹に手を引かれるのって恥ずかしいし」

「……………ブンブン」

首を横に振る↓否定

「どうしても手を繋いどかな駄目か？」

「……………いや？」

「嫌じゃないに決まってるだろ！！」

ふふふ、あんなウルウルした目で見られて断れる男などこの世に存在せぬわ！！

「恋、肉まん食べるか？」

「…………コクコク」

ああ、恥ずかしいけど和むからすべて良しとする。

しばらく町を歩いてると、見るからに『武器防具等扱ってます』みたいな店についた。

「…………店主さん」

「おお、呂布様。お久しぶりで御座います。今日はどのような御用事で？」

見るからに商人の初老のオツチャンだなコイツ。

「……兄いの武器と防具を売って欲しい、お金はまた依頼で払うから」

こりゃまた突然言うね恋ちゃんよ。

「アナタは、呂布様のお兄様なのですか！？いつもお世話になっております」

「一応、義理だが兄妹だ。それと此方こそ多分世話になってる」

「いえいえ、私なんかは、呂布様が活躍される度に家の武器や防具が売れに売れるのですから、本当に有難いことですよ」

という事は、恋の方天画戟（恋にはまだまだ大きすぎるのでは？）を作ったのはこのオツチャンか。

「とりあえず、武器を見せてくれ。代金はさっき恋が言った方法で必ず払う」

「どうぞどうぞ、ゆっくり見ていって下さい」

そういうと店主は、店の奥に一度戻った。

「初めて見た時から思ってたけど、恋ってやっぱり強いんだな」

「……兄いも強い」

「ああ、強いに決まってるだろ」

流石は俺の妹（昨日から）、よく分かってるな。

まあそんな他愛もない会話をしながら武器を見ていく。

うむ、剣も捨てがたいが槍もいいなあ。

でも……

「店主、この店で一番大きい直槍を見せて貰えないか？後は、手甲と脚甲も一番丈夫な奴を頼むわ」

「一番大きい直槍と、丈夫な手甲と脚甲ですね。直ぐに用意致します」

そういうと店主は、店の従業員っぽい男を5〜8人連れて店の奥に入って行った。

ふと、恋に目をやると、何処で買ったのか知らない肉まんを、店の前でマフマフしてた。

和むな……

しばらく恋で和んでいたが、店主が何か引き連れて出てきた。

「はあはあ、こ、こちらが当店で一番大きい直槍で、こちらが丈夫な手甲と脚甲です」

見るとそこには、大人8人で運ばれてきた、長くてかなり重そうな朱色の直槍。

それに、店主の持っている赤と黒の模様の手甲と脚甲と、俺の頼んだ理想通りの品々が出てきたのだ。

そして、俺は思った。
凄く品揃えが良いなココ……と。

「しかし、手甲と脚甲は大丈夫でしょうが、直槍は貴方様には重くて持てないとおもうのですが……なにせ、この直槍は先代の頃からあるのですが、未だに誰も扱えないのですから」

なんだとコノヤロー。
舐めやがって……

俺様に持てないだと、やる前から諦めてどうすんじやい!!

「じゃあよ、俺がこの直槍を一人で持ち歩けたら、タダで譲ってくれよ」

……………

一瞬にして沈黙したオツチャン十従業員共だったが、すぐに笑いだした。

「はははっ、いくら呂布様の御兄妹といってもこの武器は持てませんよ。もしも持てるのなら良いでしょう、全部タダで差し上げます

し、此方の手甲と脚甲も成長に合わせて調整するのもタダでやらせて頂きますよ」

「ふはははは、言ったなオッサン、今の言葉忘れるなよ!!」

「ただし、持てなかった場合は依頼の量を倍にさせて頂きますからね」

「構わねーよ、俺様を舐めるなよ……」

見たら誰もが無理だと言うだろう。

だからこそ、やる意味があるのだから!!

従業員共が床に槍を置くとズシンと音がした。

俺はその直槍の丁度真ん中の辺りを右手で掴んだ。

「おいおい、コイツ片腕で持ち上げようとしてるぜ……」
「頭オカシインじゃねえのか…」

「…し、信じられない、この槍を片腕で持ち上げたなんて……しかも、まだ子供なのに………」

店主と従業員共は、信じられないものを見ているような顔をしていた。

ふふふ、ざまあ。

「とりあえずオッサン、賭けは俺の勝ちだ。この槍と手甲に脚甲は貫っていくからな」

仁は笑顔でそう言って、恋に手甲と脚甲を持たせて店を後にした。

「あの…!! お客様、お名前を…!!」

「ああ、俺は孫海、よく覚えとけ」

そう言って本当に店を後にした。

店を出てから城の方に向かってる途中だが、一つ言いたい事がある。

「……兄い、重い？」

「ええ！？重くないよ全然、全く、欠片も！！」

そう言って槍を片腕で上げたり下げたりする。

言いたい事って言うのは……

重たああああああい！！

けども恋の前で重いなんか言いませんがね。

俺は担ぐ肩を左右ちよこちよこ変えたりしているが、そろそろ下半身が限界っぽいな、プルプルしてきたぞ……

「……兄い??」

「どうしたあ恋！！俺はなんとも無いぞお！！」

そして、跳ねたり振り回したりしていた。

しばらく歩くと、城に着いた。

ふふふ、男は少し見ないと大きくなるって誰かが言ってた気がするが、俺もこの城までの道中で強くなった気がするわ。

既に限界を超えた俺の両腕と両足には感覚が無いがな！！

「はーはっはっはっはっはあ！」

「…兄い大丈夫？」

「何でもない、笑いたかっただけだ」

そしてまた槍を振り回すのだった。

漢一4（後書き）

はい、やりましたね。

大人8人で持つ槍を片腕って……

筋力LV的には魏の許緒や典韋とか以上にすでになってしまいました。
た。

ちなみに、直槍はあの戦人の朱槍をちょっと大きくした物をイメージして下さい。

主人公の前世の名前も軽く似せてるので、やはり武器も……って思ったのであります。

手甲と脚甲は魏の楽進の奴と同じ感じで、メイン黒で赤装飾みたいななんをイメージして頂ければ嬉しいです。

次回も作者なりに早く仕上げれるように頑張ります。

漢一5（前書き）

初の連投です。

酷い出来かもしれませんが、見守って頂きたいです。

漢一5

あの後、城に行つて受けた俺の初依頼が「賊討伐」っていう、いかにも初歩的な依頼だ。

依頼を受けて俺と恋は、町から少し離れたところにある村に来てる。

「えっと、たしかこの村にちよくちよく手を出してる賊の壊滅が、今回の目的だよな？」

「……コクコク」

今は村の長に用意してもらった、素敵な小屋（村の入り口付近）にて二人で身体を休めてるところだ。

しかし、

「いくら、俺達が2人だけだから信用できないからって、この扱いは酷いよな……恋、寒くないか？」

「……ん、大丈夫」

季節はよく分からんが、今は夜になると結構肌寒い。

それを、よく分らん布切れを2枚だけで、しかも、この小屋ぼろぼろだから隙間風とかハンパねえから寒くてしゃあねえ……

「ふえ、ふえ、ふえつくつしょん！！！！ああ、クソ！！！」

さすがにちよつと寒いな。

「…兄い、こつちくる」

「いや、でも、それは…」

「…じゃあ、恋がそっち行く」

「いや、だから、それも…」

今、俺と恋は部屋の隅に離れて座っているのだが、俺が寒そうにするたびに恋が俺の側にこようとするから困ったもんだ。

いくら、兄妹といっても、女とく、くつつくなんて……／／／

それだけは、ちよつと俺が耐えれんから無理だ。

「…兄い、寒い」

「じゃあ、俺の使ってる布も使えよ」

「……………」

俺が布を渡したが、恋は俺の事をジーツと見ている。

俺が寒いから近づこうとしても無理だから、自分が寒いといって近づかせようなんて、恋にしては結構頭を使ったかもしれないが、俺がこの程度の策で引っかかると思うなよ!!

「ふあつつくしょん!!!!」

「……………兄い」

「いや、寒くないからな、全然、ちよつとくしゃみしてみただけだから」

「……………そんなに恋とくつつくの嫌？」

俺が頑なに拒否してたら、遂に恋が、目をウルウルさせてそんな悲しいことを言った。

「いや、嫌じゃないよ!!!!嫌じゃないけど……………なんていうか……………恥ずかしいか……………その…」

「……………??」

ここで、疑問系ですか。

はあ

「分かった、寒いからこっち来てくれ、恋」

「……………ん」

俺がそう言うとし嬉しそうにひよこひよこ俺の隣にきて、羽織っている布を俺の身体にも羽織らせ、肩を摺り寄せてきた。

「……兄い、暖かい」

「そだな、暖かいな」

さっきまで、色々考えていた自分がなんか馬鹿みたいだな、恋は俺の妹なんだから別にくつついても問題なんか無いよな!!

「うひゃ!!恋、どこに手を入れてるんだ!!」

「……兄いの服の中も暖かい」

いや、やっぱり駄目だ、頭がクラクラしてきた。

相手はまだまだ俺と同じぐらいの子供といってもやっぱり女の子は俺にはキツイ……

その後、賊が現れる時まで俺が色々と戦っていたのは言うまでもない。

「……くる」

「ああ、そんな気がする」

しばらくして、俺と恋は村の入り口のほうから嫌な感じが近づいてきてるのに気付いた。

「よし、精神修行始めますか!!」

「……兄い」

「ああ、無理はしない」

俺がそう言うのと恋は頷いて、2人で小屋から出て入り口の所で待機することにした。

程なくして、いかにも怪しい集団が俺と恋の前に現れた。

「ああん、てめえらみてえな餓鬼がこんな村の入り口で何してんだあ？ そんな危なっかしいもの持って…」

一番先頭にいた、ひげ面のオッサンがそういった。

「えっと、とりあえず……誰が餓鬼だってコラ!!」

「…兄い、駄目!!」

あんな弱そうな奴に馬鹿にされて、突っ込もうとしたところを恋がとめてくれた。

「なんだあ、小僧、俺達になんかすんのかあ？」

「やめてやれよ、怖がってんだからよお」

となりの、チビの親父もなんか言ってる。

まずは、我慢だ。

「あの、おじさん達はここになんか用ですか？」 ↑超棒読み

「とりあえず、金と食料と女をまた貰いに来ただけだ、なんならお前の隣にいるお嬢ちゃんを貰ってやろうか？」

いやらしい目で恋を嘗め回すように見るおっさん。

「……見るな、下種」

恋は見るからに怒っている目を賊に向けていた。

「恋はやらん。あと、お前等、改心する気は無いのか？」

最後忠告だ。

「餓鬼がえらそうな事言ってるじゃねえ！！帰ってどっかで震えろ！！！」

あ、無理。

「テメエ等、今までやってきた事と、恋に変な目を向けたこと、それに俺を馬鹿にしたこと……………全部まとめて後悔させたるわああああ……………」

俺は持っていた朱槍を肩に担いで走り出し、接近してきたやつらに對して、朱槍を片腕で全力で横薙ぎに振った。

恋side

「テメエ等、今までやってきた事と、恋に変な目を向けたこと、それに俺を馬鹿にしたこと……………全部まとめて後悔させたるわああああ……………」

そういつて、兄いが走りだした。

「舐めるなよ、クソガキが！！野郎共、やっちまえ！！！」

頭目らしき男の命令で、前のほうにいた奴等が全員武器を構えて兄いに向かって走り出した。

恋は、兄いが危ないと思って走り出したけど、心配なかった。

兄いは賊が武器の範囲内に入るとすぐに槍を片腕で持ち、

「ううううらあああああああああああ！……！！！！！！！！」

槍を横薙ぎに振るったのだった。

すると、槍の棒の部分にいた奴等は、槍をはじこうとしていたが、その持っていた剣ごと頭を碎かれていた。

そして、槍の刃の部分にいた奴等は、特に何も出来ずに頭と胴体が永遠の別れを告げた。

今の一撃で10人は死んだ。

「……すごい」

ただただ、真っ直ぐに横に振るわれた槍の軌道はとてもきれいで、一切ずれることなく振るわれた。

兄いは、とても辛そうな顔をしてる。

恋が、頑張らないと！！

そして、恋も賊に斬りかかっていった。

仁 s i d e

朱槍の一撃は凄まじいものだった。

もともと、規格外の長さに重さの槍だったのだから、その威力は恐ろしいと思った。

まあ、振るえる俺も十分におかしいだろうが。

ただ、槍で奪った命は恐らく10人程。

たった一撃で10人の命を奪った。

覚悟は完全に決まった。

俺は閉じていた目を開けて高らかに叫んだ。

「俺の名は孫悟空！！これより鬼となる！！！」

そう叫んで、槍を賊に向かって一直線にぶん投げた。

その槍は次々に賊を巻き込んで、殺し、地面に突き刺さった。

賊共の目にはただ恐怖しか見えなかった。

「死にたい奴からかかってこいやああああ！！！！」

俺は手甲と脚甲のみで賊の集団に突撃していった。

しばらくすると、そこには俺と恋、それに賊の頭目らしきオッサンしか残ってなかった。

「ひいいい、すみません!!!! なんでもします!!!! だから命だけは助けてください!!!!!!」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔で懇願してきた。

「男なら責任は取れ!!」

俺は全力で頭目の首を蹴りでへし折った。

体中の血液が脈打っているのが分かる。

俺も恋も返り血で真っ赤だった。

「くうう、うがああああああああああああ!!!!!!」

吐き気が凄まじく襲ってきたが、俺はソレを耐え抜き、今は気持ち静める為に地面をただ殴り続けていた。

地面はかなり陥没し、手が軽く出血し始めたころ、恋が、後ろから急に抱き着いてきた。

「……兄い、頑張った、えらい。だから、もう帰って休も」

優しく語り掛けるように恋は言った。

すると、興奮していたのが、徐々にであるが落ち着いてきた。

「ふう、ふう、はあ、……………恋ありがとう。とりあえず、もう大丈夫だから」

「……………ん」

俺は恋を先に村に行かせ、一人でこの賊全員分の墓をまとめて作った。

死体をすべて地面の穴に納め、埋めて、その上に石を置いて墓を作った。

「俺の自己満足かもしれないが、安らかに眠ってくれ」

簡単にであるが、賊を弔い、村に戻った。

村に戻るとすでに恋が報酬を貰っていたので、すぐに家に帰る事にした。

帰っている途中、恋は俺の手を離さなかった。

家に帰って、食事にしたが、俺は全然食べられなかった。

そして夜になっても、なかなか眠ることが出来なかった。

目を閉じて思い出すのは、肉の感触、骨の感触、断末魔……

俺は弱い。

今も、恋に手を握ってもらってなんとか落ち着いてる状態だ。

恋は、今までに何度こんな夜を一人で過ごしたのだろう。

やはり俺は弱い。

恋の手を少し強く握ると、恋は握り返してきた。

「……兄い……むにゃ……」

そうだな、俺はこの子の兄なんだ。

ならば、この子を守るためにも俺は強くなろう。

絶対に強くなってやろう。

俺は、改めてこの世界で生き抜く事を、自分勝手かもしれないが、奪った命の分だけ生き延びる事を、天に誓った。

俺は、まだまだ強くなる。

漢一5（後書き）

よし、とりあえず早く本編に行きたい。

なので次回はちょっと時間が飛ぶかも知れませんが、その辺は暖かく見守って頂きたいです。

駄作は駄作なりに一生懸命頑張りたいと思います。

漢一6(前書き)

ども、シャケです。

日本語って難しいなって、小説書いてるとよく思います。

漢一6

ういっす、仁です。

早いもので、俺が恋と兄妹になってから2年経ちました。

もちろん、その2年間は、恋と遊んだり、賊討伐したり、用心棒やったり、恋と勝負したり、町で喧嘩したり、喧嘩したり、喧嘩したり、喧嘩し……

色々あったが、こんな感じで俺も14歳になった。

「デメエ!!! 今日という今日は許さねえからな!!!」

とまあ、今も喧嘩中だったりするのだが…

最近実はちょっと困っていたりする。

まずは、恋の食費だ。

「この野郎!!! 死ね!!!」

成長期という事もあったか、もともと良く食べるのが、恐ろしく良

く食べるようになったりしたから結構食費が掛かる。

「うらあ!!」

あと、恋に身長が抜かれた事だ：

女は成長期が男より早かった気がするから、仕方ないと言えば仕方ない。

俺も最近ようやく成長期に入ったのか、だいぶ追いついてはきたが
……

「ガブア!?! こっこの…クソ野郎…：…が…：…」

え？

喧嘩？

してるよ、もう終わりそうだけど。

そんな事よりも、一番の問題は…：…恋は成長期でちょっとむっ…
胸とか出てきてるのだ。

それなのにあろう事か未だに俺に抱きついたりしてくるのだ!!

何時でも何処でもすぐに抱きついてくるのだぞ!?

そりゃ、愛情表現なのは分かってるんだが、あの…胸やら…その…
…太ももとか…あああ！！

とにかく！！俺の精神ではあんまり耐えれ無いのだ！！

はあ…

嫌じゃ無いんだよ、嫌じゃ無いんだけどな、その……な、恥ずかしいんだ。

俺は前世の頃から、女というのが苦手だ。

興味が無い訳では無いが、どうしても女に対して緊張してしまうんだ。

今はまだ俺自身が子供だから、周りにいる女も子供だ。

だからこそまだ大丈夫なのだな。

「つと、色々考えてたら片付いたな。そろそろ帰るか」

俺は周りのゴミ（オッサン×3）を路地裏に纏めて、帰るため、ゴ

ミを担いで路地裏に入った。

路地裏に入って少し進んだ所にゴミを捨てて、帰ろうとした時、ふと視界に人が倒れてるのを見つけた。

「おい！？大丈夫か！？……こりやかなり弱ってるな……しゃあねえ、連れて帰るか」

倒れていたのは、薄い緑を明るくしたような髪色の小さな女の子だった。

俺はその子を背負い、急いで家に帰った。

??? side

「う……ううん……あれ？」

ここは、どこなのですか？

えっと、ねねは、陳宮、字は公台で、真名を音々音と言うのです。

ねねは、住んでいた村を賊に襲われた時に両親を無くし、命からがら逃げていたのですが、何日も何も食べなかったのてたしか何処かの町で倒れたと思うのですが……

うん？

何やら良い臭いがするのです。

「お、目が覚めたか？とりあえず、これでも食べ、温まるぞ」

そこには、赤い短髪で褐色の肌、蒼い目が特徴的な、少し怖い目付きの男が、肉まんとお茶を持ってきていました。

「あ……その……」

「ああ、怖がらなくても何もしないから大丈夫だ。とりあえず、腹減っただろ？」

その男が少し怖かったのですが、意外と優しいような笑顔でそう言うてくれたので、安心したのです。

ねねは、肉まんとお茶を受け取り、一生懸命味わって食べたのです。

ああ、美味しいのです。

仁side

うえ!?

何か急に泣いてるねんけど!?

「ど、どうした!?!どっか痛いのか!?!」

するとその子は、涙を流してるのに自分で驚いていたが、

「いや、久しぶりに優しくされたので、多分気が緩んだだけなんです」

そう言って、また笑顔で肉まんを食べていた。

「あの、今回は助けて頂いてありがとうございますなのです」

「いや、大丈夫だ。俺は孫海って言うんだ、宜しくな」

「あつ、ねねは、姓は陳、名を宮、字を公台と言うです」

ふーん、陳宮ちゃんね。

すると丁度、遊んでいた恋が帰ってきた。

「…兄いただきま、……その子、誰？」

「おかえり、恋。この子は陳宮ちゃんって言って、俺が町で倒れたのを見つけたから、連れて帰ってきたんだ」

「…ちんきゅー、か」

「はい、陳宮なのです、孫海様、此方の方は？」

「ん？この子は呂布って言って、俺の妹だ。あと、様っていうのはやめてくれ」

「はいです。じゃあ孫海殿で」

俺達は簡単な自己紹介を済ませて、陳宮ちゃんの話聞く事にした。

「うう、陳宮ちゃん、よく頑張ったなあ」

話を聞いて、ついつい泣いてしまった。

可哀想に、こんなに小さいのに両親を賊に……

よし!!

「なあ陳宮ちゃん」

「はい、どうしたのですか？」

「俺達の家族にならないか？っていうかなれ。俺が面倒見てやる」

陳宮ちゃんはかなり驚いているようだ。

え？何で家族にするかって？

当たり前だろ？

可哀想だし、まだまだ子供なんだから。

「…ちんきゅー、恋達と家族なるの嫌？」

恋も賛成派だな。

「いや、嫌じゃないです！！でも……迷惑なのではないですか？」

「「そんな事ない」」

ふふ、恋と被ったな。

「うう、嬉しいです。ねねは、真名を音々音と言います。音が3つで音々音です、ねねって読んで欲しいです！！」

「…恋、ねね、よろしく」

「俺は仁っていう、これからよろしくな！！ねね！！」

「よろしくなのです！！仁兄様に恋姉様」

こうして、我が家に新しい家族ができた。

できたのだが……

「うわあああああああ……！！！！！！恋、何故俺の布団にいる!？」

「…兄と一緒に寝たかったから」

「…ねね、何故お前まで俺の布団に？」

「いや、ちょっと寂しかったのです…」

「恋と寝てただろ？」

「夜中に、恋姉様が仁兄様の布団に行ってしまったので……」

翌朝、起きると離れて寝ていたはずの恋とねねが俺の布団で、両方から抱きついて眠っていたのだ……

はあ、恋のせいかな…

「はあ、恋。お前は女の子なんだから、男の布団に勝手に入るなんて何回言えば分かるんだ？」

「……兄いと寝たかった」

「うう、ごめんなさいです……」

うっ、ウルウル攻撃×2か…

効果は抜群だ!!

「分かった、分かったから泣くな!ちゃんと今度からは、布団並べて寝るから」

「……コクコク」

「はいです!!」

仕方なく、今まで少し離れて寝ていたのだが、今日からは、3人並んで寝る事になったのだ。

はあ、俺って甘いのかな……

その日また寝る前に、俺を真ん中で寝かせようとする問題が起ころのだが、それはまた別のお話。

漢一6（後書き）

はい、ねねちゃん登場です。

仁はまたまた妹にしちゃいました。

ここで、仁についてちょっとした解説をしましょう。

特徴は、赤髪、短髪、褐色の肌、蒼眼、目付き悪い。

喧嘩をよく売られるのも目付きのせい。

たまに関西弁になる。（興奮したり、焦ってる時など）
理由↓前世で小さい頃関西に住んでいたから。

今の所はこんなとこです。

ちゃんと成長しきったら、また詳しく解説したいと思います。

では次回をお楽しみに。

漢一7（前書き）

ども、シャケです。

第6話にて質問があったのですが、「孫海の髪の色は孫家ならピンクでしょ」との事でしたが、ピンクと言っても皆少しづつ違うはず。

なら、赤色成分が多くて赤色の髪になって産まれたって思って頂けるとありがたいです。

漢一7

ども、仁です。

ガキイン！！

あれから3ヶ月程経ちました。

キインキイン！！

ガキッ！！

やべ、説明してる余裕ねえわ。

今は恋が手合わせしたいっていうから、手合わせしてる。

ガキッガンッ！！

やべっ！！

今かすった！！

「…兄い、本気でやる」

一旦距離を置いていたら恋が、少しむくれた顔で怒ってた。

恋は方天画戟、俺は手甲と脚甲をつけてやってる。

……そろそろ、武器に名前つけよかな。

まあ今は戟VS無手だな。

今までに何回も手合わせをしてきたが、朱槍を使ったら勝つ確率は2割程だが、無手でやった所、負けた事は無い。

「……兄い…」

あ、泣きそう!?

「い、ごめんごめん!! 真面目にやるからさ、泣くなよ」

「……………ん」

すると、すぐに嬉しそうに戟を肩に担いで構える。

「お兄ちゃんもお姉ちゃんも頑張るのですぞ!!」

ねねは、少し離れた所から応援してる。

最近はお兄ちゃんに、お姉ちゃんになったのだ。

そろそろ本気でやるか。

恋side

兄の雰囲気が変わった。

ピリピリと肌に突き刺さるような殺気を感じる。

手には嫌な汗が出てくる。

特に何も構えていないのに隙がない……

でも……

行く!!

恋が動き出すと同時に兄いも動き出す。

武器の射程範囲に………入った!!

先ずは右から真横に一閃するが、軽く身体を反らしてかわされる。

当然かわされるのは分かってる、だから、丁度兄いの前で武器を止めて、突きに切り替える。

それをさらに反ってかわす兄い、でも、その体制なら避けられないはず!!

突きを途中で止めて、下に振り降ろす!!

が、兄いはそれぐらいじゃ倒せないのだ。

恋の左手に兄いは地面に倒れるギリギリの姿勢から蹴りを放ち、ソレを柄の部分で受け止めたが、威力が強すぎて距離をとる。

「よっと、流石は恋だな。普通なら今ので終わりなのになあ。」

そう言って何事も無かったように姿勢を戻す兄い。

兄いはやっぱり強い。

でも、負けない！！

仁side

危な！？

マジで危なかったわ、薙ぎく突きく振り降ろしの流れるような切り替えはハンパねえな！！

しかも、速さが尋常じゃない位速いしな。

地面に両手をついて振り上げた蹴りで上手く弾けたけど、マジで危なかったな。

「……行く!!」

ただ、俺も受けるだけな訳ないだろうが!!

今度は突きの嵐だったがそれを弾いたり避けたりしてかわす。

ガキーン!!

「!？」

心臓に向かってきた攻撃を左腕で外に弾いて懷に飛び込み、一気に攻めたてる!!

「…くっ」

「おらおらおらおらおらあああああ!!!!」

パンチとキックの乱れ打ちを恋も必死にひたすらに防いでるが…

バキーン!!

戟を上にも殴り飛ばしながら空きになった恋の顎に左フックをギリギリで止める。

「……また負けた」

「今回も俺の勝ちだな」

今回もまた俺の勝ちで手合わせは終わった。

「…兄い、疲れた」

恋はその場に座り込んで両手を広げて俺を見ていた。

「ん、何だ？ 今から飯食いに行くから早く汗流して用意し…

「…兄い、疲れた、抱っこ」

「…？ 何でだああ！！？？」

「あうう、お兄ちゃんうるさいのですよ、後、ねねもおんぶを所望するのです！！」

「いやいやいや！！！」

「おかしいからね！？」

「恋も立てない事無いだろう！？」

「な、何を甘えてんだ！？早く飯いくんだからは…

「抱っこ」「おんぶなのです！！」だあかあらあ！！自分で歩きなさい！！」

未だに座り込んで両手を広げている恋と俺の周りで回ってるねね。

「……ウルウル」

「ああ！！お兄ちゃんがお姉ちゃんを泣かしてるのです！！」

「だあああ！！？？泣くなよ恋！！頼むからなっ！？泣くなって！！」

ねねが恋の頭を撫でながら、俺を楽しそうに睨んでくる。

「……兄い、恋の事嫌い？」

「嫌いなのですか！？」

何故そうなるんだあ！！！！！！

くそお、しつ仕方ないか……

「はぁ……………よいしょと／＼／＼」

恋をお姫様抱っこで抱き上げる。

「…兄いの匂い、落ち着く」

「あっあのな恋!! 頭をぐっぐりぐりするなって／＼／＼」

顔が熱い!!

やべえ恥ずかしすぎるわ!!

「ぶー、ねねもおんぶなのです!!」

「おっと、危ないだろねね」

後ろから飛び掛かってきたねねを背中に背負う。

「やっぱりお兄ちゃんの背中は安心するのですう…」

「うん、うん、それは分かったから頬づりするなあ／＼／＼」

「…兄い、恋も負けない」

「なっ なっ なっ！？ 何で恋まで！？」

左頬はねねが、右頬は恋が、それぞれ頬づりしてくるもんだから堪ったもんじゃねえ！！

女の子の顔が…匂いが…か…感触がぁ…………

「あ…………」

俺はクラクラする意識を簡単に手離した。

目を覚ましたのは、家について直ぐだった。

「はぁ……死ぬかと思った……」

「大袈裟なですよ、やっぱりお兄ちゃんは女の子に弱すぎるのですね」

「…兄い、女の子苦手」

「うぐ……コレばかりはなかなか治らんからな」

2年一緒に過ごした恋に完全にバレてるのは分かるが、3ヶ月程のねねにまでここまで言われるとは……

情けないな……

「てか、分かってるんだったらやたらベタベタくっつかないで欲しいんだが？」

「…嫌」

「嫌なのです!!」

即答かよ……

「まあ良く無いけど、とりあえず飯だ。さっさと用意して町に行くぞ」

それからすぐに俺達は町に向かい、比較的安くて、沢山食べれる店に入った。

まあここは、俺達の行き着けの店だ。

「いらっしやい!! ああ孫海に呂布ちゃんに陳宮ちゃんか!! 注文はいつものでいいね?」

「いつもので頼むのです!!」

元気なオバチャンだ。

俺達は席について料理を待つ。

しばらくして、料理が運ばれてくる。

俺は炒飯とチャーシューメン大盛、ねねは麻婆豆腐と小籠包、恋は特製ラーメン超特大大盛に小籠包の山だ。

お、今日は餃子がサービスでついてるな。

「いただきます」

「いただきますです!!」

「…いただきます」

皆で手を合わせて食べ始める。

ガツガツ……

マフマフ……

「はぁぁ／／／」

「ねね、恋が可愛いのは分かるが、今は自分のご飯に集中しなさい」

「マフマフ（うんうん）…」

「はっ!?! そうなのです、食べるの忘れてたです!!」

まあそんなこんなで食事は賑やかで楽しいものだった。

支払いはいつもねねの仕事だ。

正直、俺も恋も金の計算が苦手で、ねねが来るまでは先に金を渡して、食べれるだけ食べたりしていたので正直仕事が大変だった。

でもねねは、頭が良いので家の財布は全部ねねに任せてある。

その為、計画的に仕事も出来るし、必要な物を買う事も出来るようになった。

「ねね、あと何日ぐらいいけそうだ？」

「うーん、恐らく後2日が限界だと思うのです……」

「了解、じゃあ明日は仕事しに行かなきゃな、ねねはどうする？」

「ねねはお兄ちゃんとお姉ちゃんのお手伝いをするです!!」

両手を上に突き上げ気合いをいれるねね。

「ははは、じゃあ明日は3人で依頼を受けて久しぶりにガッツリ食べるぞ!」?

「おー!! なのです!!」

「…おー」

3人で店の前で盛り上がっていたのだった。

その後は、明日の依頼を受けて家に帰り、翌日に備えてしっかり休む事にした。

ちなみに依頼は要人警護だそうだ。

そんな事よりも……

「恋、近い」

「…遠い」

「ねねも近い」

「まだまだ遠いのです」

「いやいや近いからな!! 寝返りちょっとでもしたらくつつく距離は近いに決まってるだろうがああああ!!!!!!」

夜は長いのであった。

漢一7（後書き）

うーん、拠点的なのは難しい……

上手くできたか不安です。

作品内の時間をどんどん進めて仁達を大人にしていかないと……

メインのストーリーが進まないですからね。

次回は要人として、あの子の登場です。

恋といえば……分かりますが、とりあえず次回をお楽しみに。

感想やご指摘をくださった方々、ありがとうございます。

これからもよろしく願います。

漢一8（前書き）

ども、シャケです。

いやあこの前小説情報を見てたらなんと、お気に入り登録が1000を越えてました！！

こんな自己満小説をお気に入りに入れてもらえるなんて、感謝感激雨霞です！！

これからも、文才なんて欠片も無いですが頑張っていこうと思います。

これからもよろしくお願いします。

ういっす。

仁です。

今日は恋とねねを連れて、「要人警護」の依頼をこなしに来た。

「ところで、要人って何だね？」

「要人っていうのは、国の主要な人達の事なのです。それぐらい、分かって欲しいのですよ……」

ねね、そんな哀れむような目で見ないでくれ、俺は馬鹿なのだから。

あつ、多分恋も知らなかったと思うけどな。

けど俺はただ単純に頭が悪いのだが、恋はただ世間に疎いだけだから。

この辺は兄として良く分かって欲しい。

「まあお兄ちゃんが頭悪いのは分かってるのですよ、……ソレを補佐するのがねねの生き甲斐なのですがね／＼／」

最後の方は聞き取れ無かったが、ねねは顔を背けて恐らく笑顔で言っただろう。

だが耳が赤くなってるが、どうしたんだ？

暑いのかね？

「ねね、暑いならその上衣脱いだ方が良いぞ？」

「暑い訳では無いのです！！何でもないから大丈夫なのです！！」／

／

何かやたら怒られたし…

「なあ恋、ねね機嫌悪いのか？」

恋にこっそり聞いたが、返答は「…兄いは鈍い」の一言で終わった。

鈍いって何がなの？

まあそんな感じでワイワイとやってるうちに、城に着いた。

うん、何で城に来たのかと言うと、「城門前に集合」としか言われてないからな。

門番にねねが話をして、待つこと一刻（この小説では30分）位。

俺達が集まってる所に、もう一人やってくるのが見える。

「うーん、武器を持ってるのが見えるから、同業者かな？」

「…女」

「誰が来ようと、お兄ちゃんとお姉ちゃんに勝てる奴などいないのです！！」

いやいや、同業者なら戦わないからな…

歩いてきた奴の姿がしっかり見える距離になってきた。

明るい紫色の髪の毛みたいなのを履いていて胸にサラシを巻いてるだけで、上衣を羽織ってる。

「…ぶっ／／／」

「…!?!? 兄いどうしたの」

「うえええ!?!? お兄ちゃん大丈夫なのですかあ!?!?」

その姿を確認した俺は鼻血を出してぶっ倒れてしまった。

「ちよっ、どないしたんや!?!? そっちの兄ちゃん大丈夫なんかい!?!?」

のっ覗き込むなあ!?!

ああゝ何かめっちゃ揺れて／／／／／／／／／／

じゃなくて!?!

「ぶっふ…ねね…む…胸…ぶはっ!／／／／」

「はっ! その変態女、その胸を今すぐ仕舞うのです!?!」

「…早くする!」

「誰が変態女や！！胸仕舞うってどうか？」

その女は羽織っていた上衣で胸の部分が見えないようにしてくれた。

「いや、恥ずかしい所を見られたな」

「お兄ちゃん、鼻血がまだ止まってないのです」

あれ、止まってたと思ったんだが…

とりあえず、布で血を拭いて鼻を抑えといた。

「お兄ちゃんはそういうのに耐性が無いから、気をつけるのです！」

「…コクコク！！」

「いや、何でうちが責められてんのか分からんけど、まあええわ…」

「いや、何かすまん。俺は孫海、字を悟空、こっちが妹の呂布と陳宮だ」

何か悪い気がしたので、とりあえず謝って此方の自己紹介をすることにした。

「うちは、張遼、字を文遠。今は傭兵やっとり、てかおたくら同業者やろ？」

「そうなのです！！ねねのお兄ちゃんこと孫海とお姉ちゃんこと呂布の最強の武にねねの頭脳が加わった最強の傭兵集団なのです！！」

どうだ！！参ったか！？っていわん位に胸を張っているねね。

うんうん、可愛いな。

ナデナデ…

「あう…／＼／不意討ちは卑怯なのですよ／＼／」

と、言いながらも撫でられてニコニコのねね。

すると恋がすりすり頭を擦り付けてきたと思ったら、「…恋も」だそうです。

ナデナデ…

「…／／／」

目を細めて気持ち良さそうにする恋。

「ああうちをほったらかして、自分らの世界に入らんといて欲しいねんけどなあ…」

「いやいや、俺は忘れてないけどな張遼さんよ…」

「てか思い出したわ！！アンタ等がああ呂布と孫海かい！？」

あのか？

「あのかってどの？」

「傭兵やったら誰でも知っとるわ！！普通なら数十人でギリギリ成功するような依頼をたった2人で楽々成功させまくっとるのがおるっていう話や。その2人組が孫海と呂布っちゅう名前って事や」

「へー」

「…？？？」

「流石はねねのお兄ちゃんとお姉ちゃんなのです!!」

ねねは自分の事のように胸を張って喜んでいるが恋は首を傾けて頭に?を浮かべてる。

「まあ人の命を奪って有名になるのはあんまりいい気はしないが、俺の強さが有名になるのは悪い気はしないな」

「へー…意外と甘ちゃんやねんな自分、でも自分が強いって言いきれ男は嫌いじゃないで」

「…兄いは渡さない」

「お兄ちゃんはねね達なのです!!」

うん、違うから落ち着きなさい。

「別にお前に嫌われても関係ないけどな」

「なんや連れへんなあ…」

胸の前で指をちょいちょいしながら上目遣いでこっちをみている。

ちらちら……

「ぶっ／＼／＼」

「兄い（お兄ちゃん）！！」

このやろう…

わざと胸元をチラ見せしやがったな……

「あははははは！！どこ見とったんやこの助平」

どこってそんなもん見せられたら見るにきまつとるやろうが／＼／

「つてか忘れとったわ、もしかしてあんたらも要人警護の依頼を受けた口か？」

散々俺に鼻血を出さしといて、平然と元の話題に戻しやがったなこいつ…

「そうなのですよ、依頼人がどうしてもねね達に依頼したいとの事

で、依頼金も他の依頼とは全然桁が違うので受けることにしたのですよ」

「も…って事は張遼も同じ依頼を？」

「そうや、うちも呂布や孫海ほど有名ではないけど、それなりに有名やねんで」

そう言っ腕を組んで胸を張る張遼。

「まあよく分かんが、今回警護する奴がかなり偉い奴だって事だろ？」

「そうよ、今回アンタ達に警護して貰うのはこの国の大切な人よ」

俺達の会話に急に入ってきたのは、緑色の髪で眼鏡をかけた気の強そうな少女だった。

「ん、お前誰だ？」

「お前って失礼な奴ね…人の名を聞くときはまず自分からでしょ？」

「ああ、そうですね、俺は孫海だ」

「…呂布」

「ねねは陳宮なのです」

「うちは張遼や」

「ボクは賈馱、ここ涼州の太守、董卓の軍師をやってるわ」

うん？

董卓ってどっかで聞いたことあるような…

気のせいかな。

「こら、かなりの大物が出てきよったな」

「でも、そんなに偉い人の警護なんかその人に仕えてる武官がやるのではないのですか？」

たしかにねねの言う通だ。

「まあ普通はそうなんだけど、ウチで一番腕の立つ武官である華雄が今は賊の討伐で遠征してるの。元々武官が少ない上に、華雄以外に腕の立つ武官がいないのよ」

「うーん、よう分からん」

「…恋も」

俺と恋の発言に、他の3人はズッコケていた。

「つまり、腕の立つ武官がいないから、お兄ちゃんやお姉ちゃんみたいにかなり腕の立つ傭兵を雇った訳なのですね」

「ウチを忘れとるぞ」

うーん、だから仕事は…

「…かゆう帰って来るまで董卓を警護する事」

「そう、それ。流石恋!」

ナデナデ：

「あー！！お姉ちゃんだけズルいのですぞ！！」

恋を撫でたらすぐにねねが怒ってきた。

しょうがないなあ：

ナデナデ：

「ちょっと、ボクをほったらかしにして自分達の世界に入るな！！」

あ、これ2回目。

まあそんなこんなで董卓って奴を警護する事になった俺達は、顔合
わせを兼ねて玉座の間に向かった。

そこには紫をかなり薄くした色の髪色の儂げな少女が玉座に座って
いた。

「月、これから月の身边警護してくれる人達を連れてきたわ」

「詠ちゃん、ありがとう。えっと、初めまして、私は董卓と言います、これから数日よろしくお願いします」

そう言って俺達に笑顔で軽く頭を下げた。

「お兄ちゃん、ここは真面目にですぞ」

ひそひそとねねが耳打ちする。

真面目に真面目に…

「ええっと、今回は俺達に高い依頼金を払って…」

「アホかアンタは!!」

張遼のツツコミが俺の後頭部に入る。

「痛ってえなあ!! 張遼! 喧嘩売ってんのか!?!」

「お前がアホみたいな事言い出したからやろが!! ウチはやるんやったらやったんで!!」

張遼はそう言って俺に武器を構える。

胸から手を離して。

「ぶっ／＼／」

俺は鼻血を吹き出してぶっ倒れた。

「あわあわ、詠ちゃん！どうしょ！？」

「はぁ…人選間違えたかしら」

「今のはお兄ちゃんが悪いのです」

クソ、張遼め…

「ああゝ気を取り直して…俺は孫海って言います」

「…呂布」

「陳宮なのです！」

「ウチは張遼や」

ただ単に名前言うだけで良いんやんけ…

「はい、よろしく願いしますね？孫海さんに呂布さんに陳宮ちゃんに張遼さん」

「まっ色々と不安だけど、よろしく頼むわ。万が一、月に何かあったら…許さないからね」

こうして無事？に依頼を受ける事になった。

ちなみに、ねねが「何故ねねだけ『ちゃん』なのですかー！！ちっさいからですか？小さいからなのですかー！！？」って何か怒っていたが問題は無いだろう。

漢一 8 (後書き)

はい、酷いですね…

もう、難しい話は書くのが難しすぎる…

多少開き直りながら無茶苦茶に進めていききたいと思います。

とりあえず、董卓軍と絡めてみて、どーなっくか見ていくつもりです。

この作品がどーなっくいくのかも作者自身わかりません。

ですが頑張っく書いていくのでよろしくお願いします。

漢一9（前書き）

どうも、シャケです。

更新だいたい遅れましてすみません。

さて、今回拠点的なのを書こうと思ったらなかなか難しく、改めて文才が欲しいと、天に叫ぶ俺でした。

漢一9

ちわー、仁です。

董卓ちゃんの身边警護をする事になった俺達は、数日間をこの城で過ごす事となった。

ちなみに、家に残している動物達は、兵士に頼み、毎日餌を持って行ってくれる事になった。

まっ、そんな事よりもだ。

「暇だ…」

そう、暇なんだよ。

賈馱が警護を付けたのは、あくまでも何かあったら守れるようにだ。

だが、そんなもしもの事なんてーのは早々起こらないのだ。

今も董卓ちゃんが政務に励んでいる部屋の前で座ってぼーっとして

るだけだからな。

そんな俺の思いが通じたのか、ようやく董卓ちゃんが部屋から出てきた。

「あ、孫海さん、ご苦勞様です」

「まあ仕事だからな、董卓ちゃん、今からどこに行くんだ？」

「はい、そろそろお昼の時間ですので食堂に行こうと思ったので…」

ぐうぐう…

「お、俺の腹時計も昼飯って言ってるな、じゃあ行くか」

「ふふ、行きましょう」

そう言って俺達は食堂に向かった。

「…兄い、ご飯」

「お兄ちゃん、ここのご飯は美味しいですよ、一緒に食べるのです!!」

すでに食堂には恋とねねがいて山のような食事を食べていた。

「董卓ちゃん、早く一緒に食おうぜ、俺はもう腹が減りすぎて我慢できん!!」

そう言って俺は席に飛び込むようについて、飯を食べ始め、董卓ちゃんも苦笑しながらも席について、食べ始めた。

「恋、ねね、この後はお前が仕事する番だからな。頑張れよ」

「…お仕事頑張ったら、兄い誉めてくれる?」

食事中、昼から交代の恋とねねに覚えてるかの確認をした。

交代時間について簡単に説明すると、一日中ずっと一人で警護するのはしんどいから交代制にした俺達は、俺が朝食後～昼食まで。恋とねねが昼食後～夕食まで。張遼が夕食後から朝食までとなっている。

ちなみに、何故張遼が夜間になったのかと言うと、恋とねねが「夜は兄い（お兄ちゃん）と寝ないと寝れない」といってウルウル攻撃を繰り返して、しぶしぶ張遼が折れたからだ。

それは、かなり助かったが、恋とねねを甘やかし過ぎじゃないかと、賈馱に軽く怒られた。

「過保護の賈馱には言われたくない」と言い返したが、結局色々難しい事を言われて負けた。

あと、恋とねねがセットなのは、ただ単に恋が自由すぎるからねねに見張らせ、仕事をさせる為だ。

「ああ、恋もねねも頑張ったら誉めてやるから頑張るんだぞ」

そう言ってそれぞれの頭を撫でる。

「…恋、頑張る／／／」

「ねねも頑張るのです／／／」

うんうん、聞き分けの良い妹達だな、兄として鼻が高い。

「ふふ、仲が良いですね」

「まあな、自慢の妹達だ」

そんな感じで食事の時間は過ぎていった。

恋の食事する姿に董卓ちゃんが陥落したのは言うまでもない。

董卓ちゃん達と別れた俺は、する事がないのでブラブラしようと思
い城門の方に向かっていた。

「うーん、城って初めてうろついたけど、まさか迷子になるとはな
い」

実は、迷子なんで今何処にいるのかは分からんがね。

でもあっちに面白そうな事がありそうな気がするから俺はタラタラ

とそちらに向かった。

「あれは……賈駆ちゃんか？」

向かいからやって来たのは書簡を大量に抱えた賈駆だった。

「賈駆ちゃん、持つの手伝おうか？」

そう言いながら、書簡の山を8割位持つ。

「キャツ…って孫海か、いきなり現れないでよね!! びっくりするじゃない!!」

「まあエエやん、とりあえず運ぶから案内よろしくな」

「良くないわよ!!…まあ手伝ってくれるのは良いけど」

俺が書簡運びを手伝うのを案内してくれる賈駆ちゃんだった。

しばらく歩き着いたのは賈駆ちゃんの執務室。

「まあ：ありがとう、ソレは適当にその辺に置いておいて」

「ん、了解。ってか、凄い書簡の量やけど、これ全部仕事？」

「ええそうよ。ボク位になってくるとこの位の量なんか夕食までに終わるけどね」

そう言いながら席につき、書簡に何か書いたりしだす賈馱ちゃん。

「ほえ、スゲーな、賈馱ちゃんは」

「そりやそうよ、：ってゆうより、さっきから気になってたんだけどボクの事を『ちゃん』付けで呼ばないでくれる！？」

そう言って賈馱ちゃんは俺に指を突きつける。

「いやいや、だってどう見ても賈馱ちゃんは年下だろ？だからちゃん付けなんだよ、年下をちゃん付けで呼ぶのは俺の癖だからな」

「そんな『当然だ！』みたいな感じで言われても知らないわよ！」

「じゃあ仕方ないから慣れてくれ賈駆ちゃん」

「だからちゃん付けはやめてって!!」

「断る」

色々ツツコんで軽く息を切らしていた賈駆ちゃんだったが諦めたのか、また仕事を再開する。

暇だった俺は、向かいの席につき、仕事してる賈駆ちゃんを観察する事にした。

.....

「っ／／／さっきから何なのよアンタは!! もう用は無いんだからどっか行きなさいよ!!」

「うーん、暇なんだよなあ俺。だから仕事してる賈駆ちゃんを観察してたんだけど……邪魔か？」

「いや、邪魔っていう訳じゃないけど……その、アレよ!!」

「アレって?」

「いやアレよアレ……その……そうだ! 観察するならボクじゃ無くて張遼とか観察したら良いんじゃない!?」

「いや、張遼は……その……色々と駄目だ／＼／」

………

「何で張遼が駄目でボクは大丈夫なのかな?」

今の俺の発言に先程までアタフタしていた賈馱ちゃんの様子がおかしい……

なんだか嫌な予感もするし……

何より賈馱ちゃん、笑顔だけど目が笑ってないぞ。

「いやだってだな、その、張遼は目のやり場に困るが、賈馱ちゃん
は見てても大丈夫だからだなあ…」

プチッ

「それはボクが目のやり場に困る事もないお子様って言ってるのと
同じ事よ馬鹿!!」

俺はなんとなく右に逸れると、そこを書簡がさながら手裏剣のよう
に飛んでいき、後ろの壁に刺さった。

もう一度言う、刺さった。

「って、危ねえだろ賈馱ちゃん!?!何でそんな怒ってんだ!?!」

「問答無用!!」

次々に飛んでくる書簡手裏剣をかわしながら、とりあえず賈馱ちゃん
に近づいて行く。

「このっ!避けるな!!」

「いや、避けるわ!!」

一瞬、動きの止まった隙を狙って一気に詰め寄り、両肩を掴んで興奮気味の賈馱ちゃんを取り抑えにかかる。

「ちよっ触らっきゃっ!?!」

「落ち着けってっうわっ!?!」

机の上に立っていた賈馱ちゃんを取り抑える為に俺も机に登ったのだが、元々小さい机だったので、軽く暴れる賈馱ちゃんを抑えてる最中にバランスを崩し二人共倒れたのだ。

しかも、何故か寝台の上に……俺が上で……

「「……………／／／」」

俺の目の前には硬直して目を見開き、顔を赤くしている賈馱ちゃん。

「キャー！ー！！！！?!!?!!?!!」

「うわあああ!!!!!!」

ガチャ

「どうしたの詠ちゃん!!」

賈馱ちゃんの叫び声にたまたま賈馱ちゃんに用事のあつた董卓ちゃんが部屋に飛び込んでくる。

この体制はマズイ…

賈馱ちゃんの悲鳴で身体は起こせたけど…

寝台に仰向けで倒れている賈馱ちゃん（着衣に軽い乱れアリ）、その賈馱ちゃんに馬乗りにまたがる俺。

「……孫海さん……へう／＼／＼」

いやああ完全に誤解されてる!!!!

「いや、董卓ちゃん、違うから、事故事故！！完全な事故だから！
」

「へう…詠ちゃんが…／／／／／」

どンドン誤解していき、顔を真っ赤にしてしゃがみこむ董卓ちゃん。

「ちっ違うのよ月！！これはコイツの言うように事故なの！！」

「ほら、賈馱ちゃんも言ってるだろ！？」

「…兄い？」

「お兄ちゃんどうしたのですか？」

さらにタイミング悪く警護中の恋とねねも部屋を覗く。

「うわああ恋！ねね！見るなあ！！」

「ていうか、さっさとどきなさいよ！！」

恋とねねの登場に、テンパる俺を賈馱ちゃんは押し退ける。

「たくつ、いつまでも乗ってるんじゃないわよ、この変態！」

「誰が変態だ、誰が」

「孫海さんと詠ちゃんが……へう／＼／」

「…兄い、一緒に寝るなら恋」

「ねねも一瞬ですよ！！賈馱殿、お兄ちゃんを誘惑するなですよ！！」

って、なんちゅうカオスや……

「いやいや、とにかく、董卓ちゃんは落ち着け、恋は自重しなさい、ねねは黙ってなさい」

「アンタのせいなんだからね！！どうにかしなさいよ！！」

俺のせいなのか…

「賈馱殿！！お兄ちゃんはねね達のです！！誘惑するなのです！！」

「…兄いは恋達の」

そう言いながら俺の両腕を拘束する妹2人。

「誰が誘惑したって言うのよ！！」

ねねの発言に食いつく賈馱ちゃん。

「…きよっ兄妹みんなと詠ちゃんです……へうう／／／／／／」

さらなる勘違いで潰れる董卓ちゃん。

どーしろって言うんだ。

誰か助けてくれ。

「なんや騒がしいなあ、どないしたんや？」

と、そこに張遼登場、いつもの格好で……

「ぶっ／＼／＼／＼／」

「兄い！」

「お兄ちゃん」

「ちよっちよっと!?!」

「へうう／＼／」

「あっしもた!?!」

皆の見守る中、俺は張遼の兵器によって気絶するのであった。

ナイス、張遼。

その後目が覚めたのは夕飯後で、張遼には心の中で密かに感謝して、賈馱ちゃんには謝罪した。

賈馱ちゃんは「気にしてないけど、月が……」との事だった。

妹達はいつも通りに戻っていたし、気絶して正解だったかもな。

ただ、この次の日から董卓ちゃんには何か軽く誤解され続けるの
だが、それはまた違ってお話。

漢一 9 (後書き)

はい、酷いですね。

でも気にしません。

だって俺には文才なんて無いと開き直ってますから。

という訳で、これから駄文っぷりを大いに発揮する、この不定期更新駄文小説をよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1869v/>

真・恋姫夢想 ～史上最強の漢～

2011年11月17日02時00分発行